

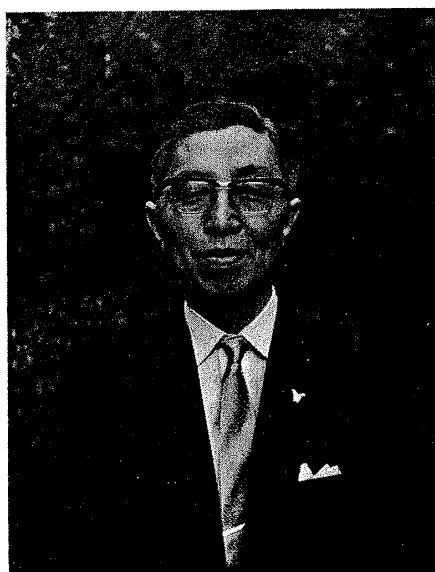
Kontyû, 38 (2): 184-185, 1970

磐瀬太郎氏を偲ぶ

朝比奈 正二郎

Memory of Mr. Taro Iwase

By Syoziro Asahina



1940年以来の本会々員であり、1954年から1958年まで渉外担当の幹事をつとめ、又1958年より1968年まで評議員であられた磐瀬太郎氏は本年(1970)2月28日に急逝された。病名は肺性心であつて、重い結核を克服して活躍されていたのに誠に残念なことであつた。又しても、失つてはならない人を失つた感が深く、謹んで御冥福を祈る次第である。

磐瀬さんは東京帝大医学部の磐瀬雄一教授の長男として誕生し、中学生時代に立派な論文(武州高尾山の蝶, 昆虫世界, 26 (3/4), 1922)を書いておられるが、1930年東大経済学部を卒業されて、横浜正金銀行(現在の東京銀行)に入られ、上海勤務を経て、1949年胸部疾患のため同行調査部長を退かれた。鎌倉に於て静

養の傍、再び蝶類の研究に戻られ、先づ日本産種の生活史の解明に関心を向けられた(本誌, 15 (5/6); 15 (3), 1941等)。爾来この方面を主としてひろく後進を啓蒙・指導・援助され、所謂アマチュア昆虫学者の推進者たる特異の位置を占めて来られたことは周知の通りである。

戦後の或る時期に本会の財政的経営が不振に陥つた際には、当時の江崎会長を助けて、会計の立て直しに当られ、自ら労を厭はず真に適切な施策を遂行された。又渉外幹事として、海外諸団体との交渉に当り、会の重要な活動の一つである出版物の交換を軌道に乗せ、評議員となられた後も会の財政面の諸問題について、実質上の相談役を引き受けて下さつた。創立40周年並びに創立50周年の折に編纂された学会年譜及び備忘録は、磐瀬さんの苦心の滲む所のもので、表面に顕れにくい而も極めて重要な貢献であると思う。

本会が一応立て直り、運営が兎に角軌道に乗ることの出来た点に対する功労者として、創立50周年の機会に表彰を受けられることとなつたのも、むべなる哉である。

磐瀬さんは戦災で標本を失はれ、又病床に就かれてからは、標本の蒐集は断念されたが、一方内外の文献をひろく入手され、その内容を紹介普及され、鱗翅類生活史のほか、一

1970

KONTYŪ

185

般の昆虫類の飛翔移動の問題に強く関心を抱かれた。直接論文の形にされたウラナミシジミ・イチモジセセリの外にも、ひろく文献を漁渉され、亡くなられる直前まで、折から出版された C. G. Johnson の大著を読んでおられたことを知った。

御葬儀の後、御宅の霊前に、注文された外国文献が封を切らぬままに供えられているのを見て、感慨の胸に迫るものがあつた。アマチュア昆虫学者の代表のように思はれていた磐瀬さんであつたが、現実「昆虫学の進歩普及を図る」という意味に於て、本会に貢献されたことは何人も否定することができないであろう。

磐瀬さんの法名は、弘竟院鱗翅朗道居士、お墓は東京染井墓地の中央部、江崎先生の墓標と程遠からぬ所にある。東京都港区白金6の15白金第一マンションズ901号の御宅は、文子未亡人に守られてある。

会 報

会 員 異 動